

兵庫県立大学環境人間学部 研究報告第12号（2010年）

# インドネシアにおけるBatara Indraに関する伝承と気候変動

岡田真美子、神頭 成禎

人間環境部門、環境人間学部客員研究員

## The Relationship between Two Chronicles about Batara Indra and Climate Change in Indonesia

Mamiko OKADA, Yoshitada KANTO

School of Human Science and Environment,  
University of Hyogo,  
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

### Abstract

Pura Tirta Empul located in Bali, Indonesia, has the chronicle about Indra. It is said that it was built by King Sri Candrabhaya Singha Warmadewa of Bali Warmadewa dynasty in 962, and it was decorated by King Airlangga of Java Kediri dynasty in the 11th century.

In 960s, a temperature departure is comparatively stable, and it is thought that the climate condition was good. However, in the era of Airlangga, temperature decreased rapidly by the Oort Minimum. An Indian Ocean monsoon which is influence the rainfall of Southeast Asia decreased, and then the large-scale famines and droughts occurred in India and Southeast Asia.

Around these times, Arjunawiwāha to describe normalization of Indra world was written, and Pura Candi Belahan was built in the Airlangga era, and Airlangga decorated Pura Tirta Empul where is related to the God of rain and thunder, Indra. They have an important meaning for thinking about climate at that time. So this paper is described to seek the existence of Indra in those texts.

Keywords: Indra, drought, the God of rain and thunder, chronicles and climate change

### 1. はじめに

インドネシアバリ島のTampak Siringに位置するPura Tirta Empul（聖なる泉の寺院）に、Batara Indra（あるいは、Bhatara Indra. インドラ神）に関する伝承が残されている。Pura Tirta Empulは、962年にバリ島ワルマデワ王朝の王Sri Candrabhaya Singha Warmadewaによって建立され、またその装飾は11世紀にジャワ島クディリ王朝の王Airlangga（991-1049）によってなされたとされている。

960年代は、比較的気温偏差が安定しており<sup>\*1</sup>、気候条件は良好であったと考えられる。それゆえバリ島ではワルマデワ王朝が花を開き、またジャワ島においても古

マタラム王朝が栄華を誇っていた。しかし11世紀に入ると、すなわちAirlangga王の時代には、太陽活動がオールト極小期（Oort Minimum）に入り気温が急激に低下する。これにより、同国の降雨量に大きな影響をもつインド洋モンスーンが減少し、いわゆる南西インド洋エルニーニョによってインドにおいても大規模な飢饉や旱魃（1022 - 1033, 1052 - 1060）が発生している。このような時期に、Indra界の正常化を描く物語Arjunawiwāhaが執筆されたことや、Airlanggaに関連する寺院Candi Belahanが建立されたこと、またIndraの力によって泉が湧き出たとするPura Tirta EmpulがAirlanggaによって装飾され神の像が奉納されたことの

意味は大きい。本稿では、これらの中におけるIndraの存在、あるいはそれが果たす役割について探求をしていくこととする。

## 2. Airlanggaと「水」

Airlanggaは、インドネシアにおいては水を司る神とされるVishnu（ヴィシュヌ神）と同一視される<sup>\*2</sup>。彼の霊廟とされるジャワ島のヒンドゥ寺院Candi Belahan（1049）には、かつてそれを示すレリーフが安置されていた<sup>\*3</sup>。寺院内の泉（沐浴場）にはDewi Lakshmi（美と豊穡と幸運の女神）とDewi Sri（稲の女神、あるいは豊穡の女神）の像が安置されており、そのDewi Sriの両乳房から噴き出す聖水によって泉（沐浴場）は豊かな水が満々と湛えられている。この泉（沐浴場）は現在も使用されており、その噴き出す聖水は日々の儀式の中でも用いられている。

寺院の建立された1049年頃は早魃期と一致しており、主目的はAirlanggaの霊廟としての機能であるが、同時に水を司る神Vishnu（あるいは、それと同一視されるAirlangga）に水の恵みを祈願することが含まれていたと考えられる。

写真1. Vishnuとして表されたAirlanggaのレリーフ



出典：Worshipping Siva and Buddha:  
the temple art of East Java<sup>\*4</sup>

## 3. Arjunawiwāhaに描かれるArjuna(Airlangga)とIndra

1035年に著された古ジャワ語の叙事詩Arjunawiwāha（アルジュナの結婚）では、雷雨を司る神Indraの子Arjuna<sup>\*5</sup>を通して、Airlanggaの業績が讃えられている。Arjunawiwāhaは、Indraが治める天界を悪魔（あるいは、巨人の王）Niwātakawaca<sup>\*6</sup>によって攻撃されたとき、人間界よりその救い手としてArjunaが選ばれる。Arjunaは、洞窟に籠り瞑想をしていたが、Niwātakawacaによって差し向けられた猪によって妨げられる。彼は、破壊と再生を司る神Siwaとともにこれを倒す。Arjunaは様々な試練を経て後、Siwaの武器（Pasupati）と聖なる力を得る。その後Indraと面会し、Niwātakawacaの討伐が正式に要請される。Niwātakawacaは、神々によって遣わされた天女Suprabhaに魅せられ、弱点（唇、あるいは口蓋垂）を彼女に教えてしまう。弱点を知ったArjunaはNiwātakawacaを一矢のもと倒し、神々の世界に平安を取り戻す、という物語である。

Arjunawiwāhaは、ジャワの影絵劇Wayang Javaの中でも演じられており、ジャワの人々によって愛され続けられている。Arjunawiwāhaでは、Indraが地上界に降りた時の様子について次のように描かれる。

…雨雲によって隠された（苦行者の）住処を見つける。雨季であったため、彼は震え、杖をつき歩くのに奮闘した。（canto 5.3）

またArjunaを試すべくIndraによって天女らが地上界へと舞い降りるが、その時の描写もまた霧によって視界が遮られている。

Wayang Javaにおいても、同様に描写される。ただしダラン（語り部）によって、その様子はさらに細かく描写される。その一場面である七人の天女が地上界へと降りてくる様子を、次のように描く。

ウィトロゴ（アルジュナ）の洞窟の傍らに声なく、ウィトロゴの山の斜面はうつろいゆく雲に蔽われ、ぼんやりとみえ、ついには霧雨がおち、山の斜面に咲きそめた花々の芳香といりまじる。そのとき陽は傾き、西の山の端にかかろうとする。やがて妖しのチャンディク・オロのひかりが映え、ひとの心をまどわす黄金色のひかりにのって、七人の天界の美女たちが降りてくる。<sup>\*7</sup>

ここに描かれる「霧雨」や「黄金色のひかり」は、それぞれ雨と雷として例えられよう。またIndraが地上界

へと降りる様子については、次のように描かれる。

風にのり、空からいきなりインドロキロ山（インドラキラ山）の斜面へ降ろうとする。山の頂きは遠くからぼんやりと見えている。インドロがインドロキロ山へと近づくと、山はすっぽりと雲に蔽われた。雲は厚く、真黒にみえ、ほどなく雲は大風を伴い、激しい雨を降らせた。大風はよじれ、旋回し、いよいよ激しくなりまざる。これこそ真実なる苦行にはげむ人の霊力のゆえであり、このときサン・ヒワン・インドロはインドロキロ山の真上にきて、風にたたきつけられ、大地に倒れ、失神して横たわった。<sup>\*8</sup>

そのときインドロキロ山の真上にきて、雨風にたたかれ、インドロキロから遠くに吹きとばされ、大地に倒れ、うち伏した。失神して、サン・ヒワン・バトロ・インドロは前後も覚え、また突如眠りから醒めたように、よろめき歩き、彼はワリンギンの木の林のただ中にしゃがみ、座している。強力な雨風のゆえであり、ずぶ濡れにもなったのだが、これは背中に噴きでた汗のせいだ。サン・ヒワン・バトロ・インドロは、心中に苦行者の霊力を讃える。心の中で苦行中の人を讃えていると、空に雲は消え、明るくなり、太陽の光りが西の山の端にかかるのがみえる。<sup>\*9</sup>

ここに描かれる「(重厚で真黒の) 雲」「大風」「激しい雨」は、まさにIndraの性質を示すものである。また「(Indraが) 空からいきなりインドロキロ山の斜面へ降ろうとする」描写や「(Indraが) 山の真上にきて後、大地にたたきつけられる」描写、また「前後も覚え、また突如眠りから醒めたように、よろめき歩く」描写は、これらの要素が苦行者（すなわち、Arjuna）の霊力によってなされたものであるとされているとはいえ、Indraの性質である「雷」を連想させる。したがってこれらの要素や描写は、雷雨を司る神Indraの性質を如実に示すものであるといえよう。

その後、Niwātakawacaによって差し向けられた猪（羅刹、悪魔Mūkaが変化したもの）によって、Arjunaの住処である洞窟の周辺は一変する。Arjunawiwāhaではその様子を、「(猪に変化する前のMūkaの言葉)『我はこの山（インドラキラ山）を破壊する』」（canto 7.4）、「洞窟は騒然となり、長時間にわたる地震によって亀裂が生じた。」（canto 7.5）と描く。またWayang Javaでは、「(猪に変化する前のMūkaの言葉)『わしはチプトニン（Arjuna）の園をぶっこわしたい。熟した砂糖キビの園を、な。』」<sup>\*10</sup>、「(Arjunaの召使いガレンの言葉)

『おお、大変だ、大変だ。畑がめちゃくちゃだ。われらが主人チプトニンさんの大好きな熟れた砂糖キビ畑が荒らされている。』<sup>\*11</sup>、「(ガレンの言葉)『猪が暴れ、畑が荒らされた。熟れた砂糖キビもです。』」<sup>\*12</sup>と描かれる。この場面にて描かれる猪、すなわち悪魔は、Arjunaの住処である洞窟周辺にある畑を荒らしているのである。猪は、土を掘り起こし踏みつけ、また植物根を絶やすなど、食害を引き起こす。すなわちこの場面は、悪魔によって人間界の植物が危機に瀕する状況におかれたことを示す。

これに対してArjunaは、一矢をもって猪を射止める（canto 7.8）。その矢は、Siwa（あるいは、至高の神Batara Guru）が放った矢と一体化する（canto 8.1）。その後、ArjunaとSiwaはどちらの矢が先に猪を倒したのかを言い争い、戦い、やがてArjunaが負かされることとなる。このArjunaに対してSiwaは、「この行為は試練なのじゃ。というのも、そなたはつねに神を護衛する者であらねばならぬゆえじゃ。この戦いにより、そなたはこの世を守護する力をもつことの証を示した。そなたは混乱を招く世のすべてのものを滅ぼすのだ。畑地を荒らす猪のみならず、人間でも、ラクササ（羅刹）でも、この世の平穏を邪魔立てするすべてのものを取り除かねばならぬ」とし、神々を護衛する者として認める。そしてSiwaはArjunaに聖なる武器Pasupatiを授け、Arjunaはこの武器をもってNiwātakawacaを倒すこととなる。この場面では、IndraよりもむしろSiwaの果たす役割が大きい。<sup>\*13</sup>

Arjunawiwāhaは、宮廷人Mpu Kanwaによって、Airlanggaの業績を賛美すべく著されたものであるが、そのオリジンはMahābhārataの第3巻「森の章」である。それゆえMahābhārataの中に描かれる物語とArjunawiwāhaのコンテクストには共通点が多くみられる。例えば、①悪魔Niwātakawacaが天界を攻める点、②このNiwātakawacaは神々では倒すことができない点、③それゆえ地上界の武人Arjunaに白羽の矢が立てられる点、④SiwaとArjunaが猪（邪霊の化身）を仕留めたことをめぐり争う点、⑤Niwātakawacaを倒す上で重要となる聖なる武器をSiwaから授かる点などが挙げられる。また異なる点としては、①IndraがArjunaに会いに降臨する点（Arjunaの霊力により地面にたたきつけられる）、②ArjunawiwāhaではNiwātakawacaを一矢をもって倒しているが、Mahābhārataでは壮絶な戦いがなされた点、また③Arjunawiwāhaでは物語の最後に天女らと結婚するが（Wayang Javaでは十万に一人足りぬ天女らを支配する）、MahābhārataではIndraの計ら

い（帰還の許可と馬車を用意）によって兄弟らのいる地上界へと戻っていく点などが挙げられよう。

しかしここで最も重要なのは、両物語ともに悪魔 NiwātakawacaによってIndraの治める天界が攻められている点である。Niwātakawaca によるIndra界への攻撃は、その王たるIndraの力を弱めるものである。Indraの力が弱化すれば、その性質である雷雨が減少し、あるいはそれを制御する力の弱まりによる突発的災害（鉄砲水や山崩れ、洪水など）が発生しよう。Indra界が攻撃されて後に、地上界にて生活の糧を得る場である畑地（描写される場所は、森林内の畑地）が羅刹によって荒らされるという描写は、換言すれば、旱魃や飢饉の発生、あるいは突発的豪雨や鉄砲水（猪として描写）による田畑の破壊を意味するものととらえることができる。<sup>14</sup>

1037年に記された碑文によれば、Airlanggaは国家を統一して後にBrantas川流域に堤防を築き、ダム（ため池）を建設したとされる。これは、Waringin Septa地区近辺にある堤防が決壊し、その地に位置する居住区（村）や田畑が破壊されたことによる<sup>15</sup>。この史実を念頭に置けば、Mpu KanwaによるArjunawiwāhaに描かれるIndra界の正常化（あるいは、雷雨を司るIndraの力の回復）は、雷雨の発生頻度の正常化を祈願するものととらえることができよう。

現段階においては、飢饉や旱魃がおきていたことを示す証拠はないが、ここで紹介した文献はその可能性を示唆するものである。

図1. Niwātakawaca



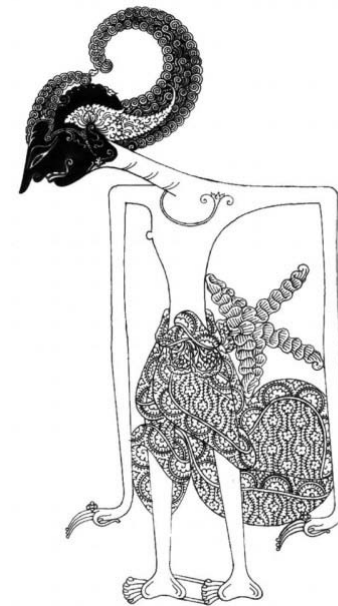
出典：Galeri Wayang<sup>16</sup>

図2. Indra



出典：Galeri Wayang<sup>17</sup>

図3. Arjuna



出典：Galeri Wayang<sup>18</sup>

#### 4. Tirta Empul（聖なる泉）とIndra

バリ島中部に位置するTampak Siringに、Indraに関する伝承の残る寺院Pura Tirta Empulがある。Pura Tirta Empulの泉（沐浴場）は、ワルマデワ王朝の王 Sri Candrabhaya Singha Warmadewaによって、962年に建立されたとされる。そして11世紀に、

Airlanggaによって装飾が施される。

その寺院内にある泉について、Indraが地面に杖（あるいは、旗）を突き刺すなどによってそれが湧き出たとする伝承が残されている。その伝承は、Kakawin Usana Bali（古代バリ史）などに描かれている。

Kakawin Usana Baliは、ジャワ島Majapahit王国による支配以降（1343 - ）に著されたものであり、Pura Tirta Empulが建立された時期に著されたものではない。また、19世紀頃に著されたとされるUsana Bali Maya Danawaでは新たに内容が追加されるなど、14世紀以降も形を変えて語り継がれている。本節では、時代を超えて語り継がれるMaya Danawa伝承、すなわちPura Tirta EmpulにおけるIndraの役割についてみていく。

#### 4.1. Kakawin Usana Bali (canto 42-44) <sup>\*19</sup>

Kakawin Usana Baliは、16世紀以降に著されたとされるバリ島の史書である。その42章から44章にかけて、Maya Danawaに関する伝承が記述される。

Iswara（イスワラ神）<sup>\*20</sup>は、Kelasa山の頂上を切り取り、これをWasuki<sup>\*21</sup>と呼んだ。そして、これを島の上に置く。それ以来、山はTolangkirと呼ばれ、また島はバリ島と呼ばれるようになる。

時代は進み、Maya Danawaと呼ばれる王が現れる。<sup>\*22</sup> 彼は、Dewi Danuの息子であり、邪霊（魔族）の王であった。Maya Danawaは、苦行によって神通力を得る。非常に強い力を得た王Maya Danawaは、欲望を満たすため、Tolangkirの神と戦う。そして多くの人々を殺害し、彼らが持つ金銀や宝石などを奪う。Tolangkirの神は、Maya Danawaを滅ぼすためIndraに援助を求める。Maya Danawaの罪は、①邪悪な妻を娶ったこと、②人々の犠牲をもとに私腹を肥やし、また邪教を広めるなど、邪道な生活を営んでいるなどである。これに対して、Indraは神軍を率いバリ島に赴く。

戦闘は激化し、双方に多くの死傷者がでた。IndraはManuk Raya（あるいはRaja[王]、これらはともにGarudaを意味する。または、村[現Manuk Aya村]）に訴え、Si Orbalaと呼ばれる旗を受け取る。Indraがこれを地面に突き刺すと、泉が湧き出る。神軍の戦士らは、この泉の水を飲み、新たな力を得る。そして、Maya Danawaを殺害するに至る。

しかしMaya Danawaの口から大量の血が噴き出し、それはPetanu川となった。この川で水浴びをしたり、あるいはそれを飲んだりした者は、不運に見舞われることとなる。戦いの後、神々はAir Empul（Tirta

Empul）と呼ばれる泉で禊をする。聖者によってHomaの儀式が執り行われ、Pasupati、Indra、及びAgniの三体の神々が讃えられる。神の国（Manuk Raya、あるいはManuk Rajaと呼ばれる）の建国と神々の鎮座が記述される。祝宴の後、神々はそれぞれの国へと戻っていった。

ここでバリ人の最初の居住地として、Lewuran、Kedisan、Tringan、及びWurumanukが列挙される。

Maya Danawaの母（すなわち、Dewi Danu）は非常に悲しみ、息子が殺されたことに憤慨する。彼女は、Tumpuhyang（Batur山）と呼ばれる山で苦行を行う。苦行を行うと、彼女の激怒はやがて湖の水を沸騰させる。そこへIndraが現れ、Maya Danawaに更生させる機会を与えるために再生をすることを誓う。そしてIndraは、蛇の少女Maliniの化身であるDewi Kawekadanを伴い、Pujung Paruhur（Agung山）へと戻って行った。

彼ら（Maya Danawaの化身とその妻Dewi Kawekadanの化身）は、Kulpinga（ココ椰子の葉鞘）で旅をする。彼らはバリ島で崇拝され、そしてDewi Kawekadanはバリ島の王族の母となった。しばらくして彼らは天界へと戻り、apsara（天人）とapsari（天女）となる<sup>\*23</sup>。

IndraはPaharwan（Basukian=Besakih）に鞘を落とし、それはその地の寺院に落ちる。寺院には、僧侶の一人であるjuru sapuh（掃除人）がいた（ただし、原典ではMasuraが掃除人の名前であるのか、あるいは『掃除人』を指す語であるのかは不明）。彼は鞘を見つけるとこれを南の方角に投げ、そして帰宅した。次の朝、再び鞘を見つけると今度は西の方角に投げ、帰宅した。次の朝、掃除人（juru sapuh）は、寺院の寝台にいる美しい少年と少女を発見する。掃除人は彼らに、どこから来たのか尋ねてみる。すると二人の子供は、鞘に乗ってやってきたと答えた。彼らはさらに、Dewi DanuとKasyapaの息子Maya Danawaの化身であるTosulaと、蛇の神AnantaとWabyaraの娘Maliniの化身Ratna Kawekadanであると告げる。そして彼らは、Indraによって遣わされたことを掃除人に伝える。彼らは地上界を良くし天界へと戻ることが目的であることを伝えると、掃除人は大変に喜んだ。掃除人は、二人が長く生き、そしてバリ島の王となる子供をたくさん産むことを望む。そして彼は二人に仕

え、彼らを結婚させた。彼らの子供、孫、玄孫ら子孫の名前には、そのはじめに"To"がつく。

#### 4.2. Usana Bali Maya Danawa<sup>\*24</sup>

19世紀頃に著されたとみられる Usana Bali Maya Danawaには、Maya Danawaが邪道へと突き進む場面が次のように描かれている。

Maya Danawaの国家の中心（王都）は、Balingkangであった。彼は、王国の領土を拡大させることを望んだ。そして多くの国を滅ぼした。Batara Danuは降臨し、彼に恩恵を与える。そして彼は、中国人の妃（putri Cina）を娶ることが許され、Honte王の長女と結婚した。

結婚後、王国は平和の中にあった。しかし中国人の妻はバリ島の生活に馴染めず、病を患った。彼女には薬も効果がなかった。Maya DanawaはTolangkirの聖地に赴き、神に慈悲を乞うた。しかしTolangkirの神は、異教を信仰する者に恩恵を与えることをよしとしなかった。Maya Danawaは怒り、この時から従来の神々を崇拝することをやめる。そして王国の人々に、Maya Danawa自身を神として崇拝させる。しばらくして、中国人の妃（putri Cina）が崩御した。彼女は、死ぬ前に、火葬の準備をしていた。Maya DanawaはTegasの東に位置する宮殿に独り残された。その12年後、彼はIndraによって滅ぼされた。

#### 4.3. Maya Danawa伝承に関する散文原典<sup>\*25</sup>

Hinzlerは、散文される原典を収集・分析し、Maya Danawa伝承に関連する箇所を列挙する。そこには、IndraとMaya Danawaとの戦闘場面などが詳細に描かれている。Indraが登場する場面は、以下の通りである。

##### 1) Indra軍とMaya Danawaとの戦いを描く物語

バリ島の支配者は、家臣らにBesakih寺院の神々を崇拝することを禁じた。これに対してMajapahitから渡島した聖者Kulputihは、ジャワ島の神々に援助を要請する。ジャワ島の神であるPasupati（Siwaの顕現）は、神軍を伴わせIndraをバリ島に遣わす。当初、Indraの軍隊は敗北を期し、多くの神軍が殺害された。しばらくして後、形勢が変わり、神軍らはMaya DanawaとPatih（大臣）を追う。Maya Danawaらは逃走する中で、神々の目から姿を晦ますため、様々なものへと姿を変えた。それらは、①パンノキの実（Timbul）、②天女（Kendran）、③ココ椰子の葉（Busung Klapa）、④巨石（Sawuh Watu）、⑤pisang

花の大きな蕾（Panyuswan）、⑥巨大な鳥（Manuk Aya）などであり、それらは村名の由来となる。彼らは神々によって発見されるたびに逃走を続けた。彼らは最後に、Manuk Ayaの南にある密林に逃げ込む。ここは、Alas Pagulinganと呼ばれている。そこには水がなく、Maya DanawaとPatihは喉が渇く。Patihは、瞑想をすることによって得た力により、泉を出現させる。彼らは泉の水を飲んだ後、泉に呪文をかける。その水を飲むと死に至るのである。それゆえ、Wai Malaと呼ばれることとなる。森に入った神軍らはこの水を飲み、その多くが死に至る。Gandarwa（天人）は神のもとへと駆け付け、BesukihとBaturの女神にその様子を伝えた。NaradaとWrehaspatiは瞑想し、神軍らを蘇生させるための聖水を生じさせるべく呪文を唱えた。そして、IndraとPutrajayaが地上界に降臨すると、泉が現れた。それは、Tirta Empulと呼ばれることとなる。その水を三度かけると、神軍らは蘇った。彼らは、Maya Danawaらを検索すべく、Manuk Ayaへと戻る。そして彼らは、nyagrodaの木に注目する。その一本の枝に、大きな鳥がとまっていたのである。IndraのPatihがそれを射ようとすると、鳥はMaya Danawaに変わった。彼は南のTampak Siringの地に飛んで行き、米（padi. 稲穂）に姿を変えた。しかし神軍らによって発見され、北西のPangkung Patasへと逃げる。そしてMaya Danawaらは、その地でparas石の大きな塊へと姿を変える。神軍らが弓を射ると、石は割れた。そしてMaya Danawaらは滅ぼされた。しかしMaya Danawaの口や耳、体から血が噴き出し、それはやがてPetanu川になる。IndraとMahadéwa（= Putrajaya）はその水に呪文をかける。その後、その水は灌漑や洗濯、飲用、聖水として使用することができなくなった。それを使用した者は、毒に侵されるのである。

##### 2) Maya Danawaが転生しない物語

Pasupati、Indra、そしてMahadéwa（= Putrajaya）は、Bédahuluに赴き、Maya Danawaの宮殿を訪れた。そしてMaya Danawaは彼らによって呪文がかけられた。そのため、彼は再生することができなかった。彼は五倍のsangsaを経験し、やがては地獄の銅釜で煮られることとなる。神々は天界へと戻る前に、バリ島の山々にヒンドゥーの神々が鎮座する場を再建した。（そしてその守衛は、）神々に服従するpunggawa（領主）とmangku（宗教長）の義務となる。またbandesa（村の長）は、神々が人々によって崇拝されるよう注意を向けなければならないのである。

以上、4種類の伝承をみてきた。これらの伝承は、Tirta Empul（聖なる泉）の創生伝承として今もなお語り継がれている。これらの伝承が語り継がれるPura Tirta Empulは、962年にワルマデワ王朝の王によって建立されている。したがって伝承内容は、それよりも以前の出来事として考えることができる。しかし同時に、これらはMajapahit王国がバリ島を支配して以降に著されたものであり、その支配過程を描いている、あるいは支配過程に正当性を与えているものとみることも可能である。伝承に登場するバリ島の王Maya Danawaを、ジャワ島の神々（王）によって滅ぼされた過程を描いているものと考えられるからである。しかしそれでもなお、Indraの果たす役割は注目に値しよう。

伝承の中に描かれるIndraの役割をみると、とくに重要なものとして、①Maya Danawaの駆逐、②その再生（転生）、そして③泉の創生である。このMaya Danawaの駆逐と再生は、支配以降のバリ島を統治する者として、バリ族王家の血を受け継ぐ者を置くことを示したものであろうと推察される。なぜなら、11世紀にバリ島を一時的に支配したAirlangga王（バリ族王家とジャワ族王家の血を受け継ぐ者）がそうであったように、Majapahit王国もまたバリ族とジャワ族の血を受け継ぐ者（Dalem Ketut Sri Kresna Kepakisan）をその統治者に置いているからである。寺院の掃除人がIndraによって遣わされた子供らを結婚させ、バリ島の王となる子供を儲けることを望んだという場面は、まさにそれを意味するものであろう。

しかしここで重要なのは、Indraが泉を創生する場面である。例えば、上述のIndra軍とMaya Danawaとの戦いを描く物語に描かれているように、泉が創生される上で「Indraの降臨」は重要な要素となっている。この「Indraの降臨」は、すなわち「雨が降りる（＝雨が降る）」ことを意味し、泉は雷雨（Indraの性質）によってもたらされたものであることが分かる。このような内容は、Maya Danawa伝承においてIndraが泉を創生する場面の全てで確認できる。このIndraの有する性質の一つである「雨」は、川や泉の水源を作り田畑を潤すなど、生命の源としてとらえられる。また「雷」は、雨の兆しとしてとらえられよう。すなわちこれらの伝承は、それが形作られる以前に雨の少ない時期があり、Indraに雨の恵みを祈願したことを伝えるものとして考えられるのである。その時期は、Pura Tirta Empulが建立された時期ではなく、Majapahit王国が「支配する以前」あるいは「支配する（バリ族の王家を滅ぼす）過程の中」での出来事とみることができる。後述するが、12世紀後期、あるいは13世紀から14世紀にかけて、早魃期であっ

たであろうことを示すデータがある。

またMaya Danawaが、湖の女神であるDewi Danuの子であることは注目すべき点である。彼女は息子であるMaya Danawaが滅ぼされたことを怒り、湖を沸騰させている。これは、その地域に居住する人々にとっての水源でもある湖に異変が起こり、彼らはその恩恵に与ることができなくなったことを示す。これに対してIndraは、彼女にMaya Danawaを再生することを誓い、その怒りを鎮めている。すなわちこの場面は、Indraの力である雷雨によって、湖が蘇った（あるいは、湖の状態が正常化した）ことを示しているものと考えられる。

これらの伝承から、Indraが登場する背景に「水」に関連する出来事があったことが了承されよう。

## 5. 気候に関するデータにみる「水」に関連する出来事

以上、二つの物語、すなわちArjunawiwahaとMaya Danawa伝承をみてきた。それらの中には、確かに「水」に関連する出来事があったであろうことが描かれている。ではそれは一体何であったのか。本節では、気候に関するデータからそれを解き明かしていきたい。

インドに位置するDandakの洞窟生成物カルサイトに含まれる $\delta 18\text{O}$ （酸素同位体組成）の増減量から南西インド洋夏季モンスーンの強弱を推定するA.Sinhaらによれば、南西インド洋夏季モンスーンによってもたらされる季節的降雨は、東南アジアの年間降雨量の80%近くを供給しているという<sup>26</sup>。彼らの研究から得られるデータ、すなわち $\delta 18\text{O}$ の値はインドにおけるものであるが、同時に、東南アジアの一国であるインドネシアの降雨量を推察する上でも大きな意味をもつものとする。

A.Sinhaらが根拠とするデータは、GNIP（Global Network of Isotopes in Precipitation：降水中同位体全球ネットワーク）の算出する $\delta 18\text{O}$ であり、それによれば彼らの調査地の年間平均降雨量は-4.8‰、夏季モンスーン時における平均降雨量は-3.75‰とされている。彼らは、14世紀から15世紀の増減量に着目する。それによれば、この時期の $\delta 18\text{O}$ の値は平均時に比べて1.0‰から1.5‰程度高く、この値はモンスーンの降雨量が減少していることを指し示すという<sup>27</sup>。事実、1344年から1345年、また1396年から1409年にかけて早魃の影響によるものであろう大飢饉がインドを襲っている<sup>28</sup>。

Majapahit王国がバリ島の支配を開始したのは1343年であり、この南西インド洋夏季モンスーンが減少している時期、すなわち降雨量が激減する時期に一致する。したがってMaya Danawa伝承に描かれる「水」に関連する出来事が、雨の減少による早魃状態にあったと推察できよう。ただし継続して早魃状態がおきているため、伝

承上のIndraによるDewi Danuの鎮静化にみられる程の雨が降ったのか、すなわちIndraの力の一つである雨がどの程度降ったのかについては不明である。しかし伝承は、降雨量の多少や降雨の頻度を推察するものではなく、雨の恵みを願う当時の人々らの心情を読み取るものとして見るべきであろう。Indraによって湧き出た泉、すなわちTirta Empul(聖なる泉)は、今もなお混混と湧き出ており、世代を超えて貴重な水として使用されている。

次にみていきたいのは、Airlanggaと「水」との関係である。彼は、インドネシアにて水を司る神とされるVishnuと同一視され、それを示すレリーフが彼の霊廟に安置されていた。1049年に建立された彼の霊廟であるCandi Belahanには、豊穡を司る女神であるDewi Sriの両乳房から水が噴き出しており、泉（沐浴場）に豊かな水を満々と湛えている。その水は儀式での聖水として、また泉は沐浴場として、今もなお使用されている。また彼の業績の一つに、バリ島ワルマデワ王家によって建立されたPura Tirta Empul（聖なる泉の寺院）を装飾し、神の像を安置したというものがある。このように、Airlanggaと「水」との間に深い関係を確認することができる。

では、Airlanggaの生きる11世紀の気候はどうであったのか。Michael E. Mann とPhilip D. Jonesによる南半球における気温偏差を分析したデータをみると、この時期のそれは大きく変化している。とくに11世紀初期から中頃にかけては、前出のA.Sinhaらによる $\delta 18\text{O}$ の値を示した図と比較すると、興味深い事実を確認することができる。表1は、Michael E. Mannらの気温偏差のデータに、A.Sinhaらによる $\delta 18\text{O}$ の値を示した図から値が0.5 - 1.0‰程度高い部分を抽出し、一つの図としてまとめたものである。そこに確認できるように、11世紀初期から中頃にかけて気温偏差が急激に変化し、その時期は同時に $\delta 18\text{O}$ 値が上昇している。 $\delta 18\text{O}$ 値が高ければ高いほど、上述したように、南西インド洋夏季モンスーンによってもたらされる季節的降雨量が減少する。そしてそれは、例えば14世紀にみられるように、インドにおいて大規模な早魃を生じさせている。この時期における $\delta 18\text{O}$ 値の上昇幅は、14世紀のそれに比べれば小さなものであるが、しかし同時期にインドにおいて早魃によるものであろう飢饉が観測されていることから、東南アジア全域の降雨量もまた少なかったであろうと推察できる。

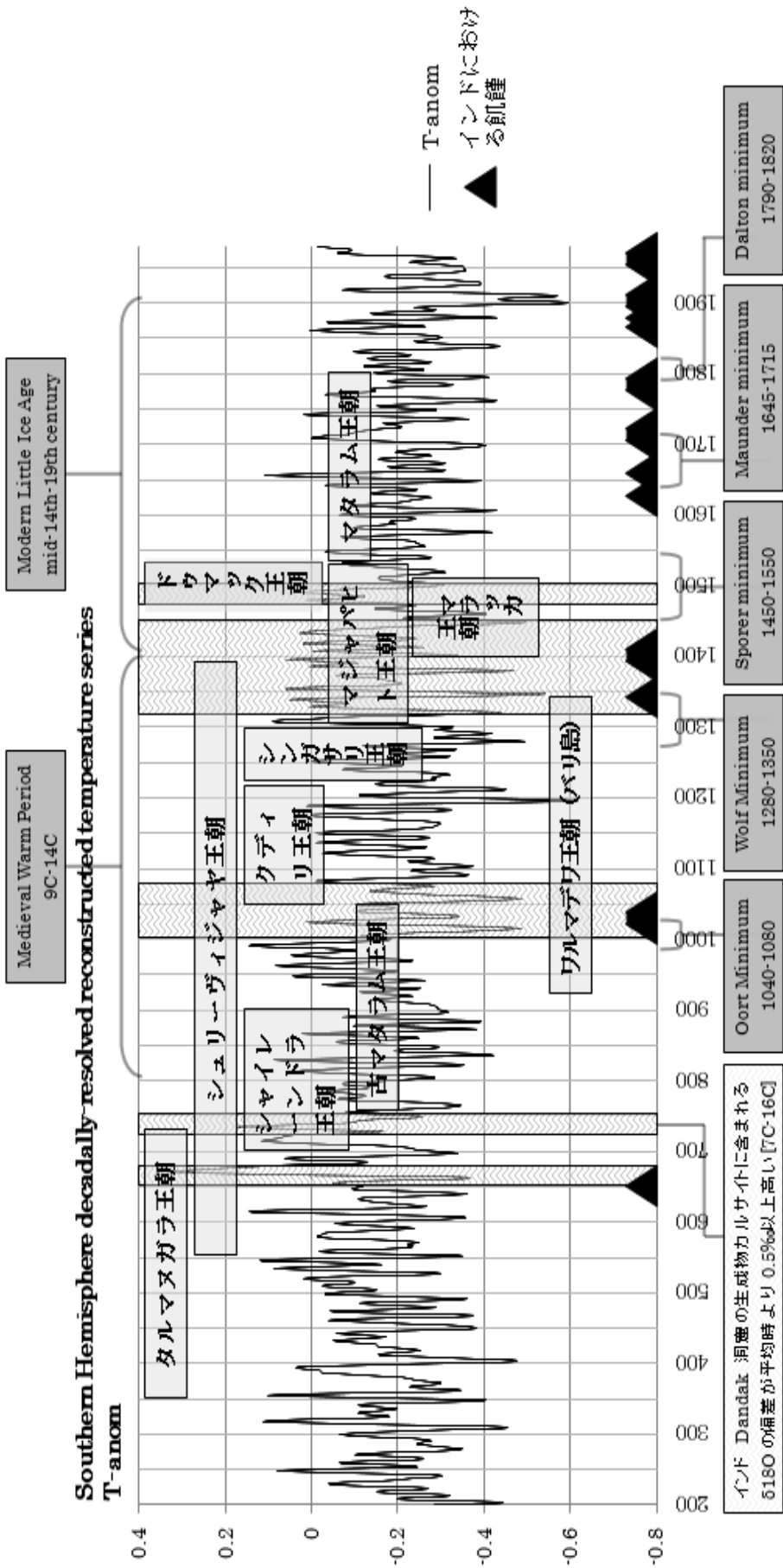
Arjunawiwāhaの中で、悪魔Niwātakawaca がIndra界を攻撃しているが、これはIndra界の混沌を示しており、換言すればその王たるIndraの力が弱められているものと捉えることができよう。ただしその弱まりは、降

雨量の減少のみならず、突発的な豪雨をも指していると考ええる。すでに上述したように、1037年に記された碑文に、東ジャワのWaringin Septa地区近辺にある堤防が決壊し、その地に位置する居住区（村）や田畑が破壊されたことが記述されているからである<sup>29</sup>。このことから、 $\delta 18\text{O}$ 値の上昇にみられるように規模の大小にかかわらず早魃はあったが、同時に突発的な豪雨に見舞われることも少なくなかったものと推察できる。Airlangga は、ArjunawiwāhaではIndraの子であるArjunaを通してその功績が讃えられ、また同時に彼の霊廟では水を司る神とされるVishnuと同一視され、さらには彼の治世においてPura Tirta Empulが装飾されるなど、「水」に関連する出来事と深く関係していることは明白である。

以上、二つの物語（Arjunawiwāha、及びMaya Danawa伝承）からIndraの果たす役割を探究してきた。これまでみてきたように、Airlanggaの治世においても、またMajapahit王国によるバリ島支配期においても、その背景にIndraの存在を確認することができる。伝承に描かれるIndraのもたらす影響、あるいは時代の節目での彼の登場は、当時の気候変動（早魃や気温偏差など）と密接に関係していたであろうことが考えられる。



表 1. インドネシアにおける気温偏差と δ18O 値の関係性



出典：Michael E. Mann and Philip D. Jones [2004] 及び Sinha A.ら [2007] を基に筆者作成

<sup>1</sup> Michael E. Mann, Philip D. Jones, *Southern Hemisphere decadal-resolved reconstructed temperature series*, NOAA Paleoclimatology Program and World Data Center for Paleoclimatology, Boulder. NASA GODDARD SPACE FLIGHT CENTER. 2004. Top [[http://gcmd.nasa.gov/records/GCMD\\_NOAA\\_NCDC\\_PALEO2003-051.html](http://gcmd.nasa.gov/records/GCMD_NOAA_NCDC_PALEO2003-051.html)], Data [[ftp://ftp.ncdc.noaa.gov/pub/data/paleo/paleocean/by\\_contributor/mann2003b/mann2003b.txt](ftp://ftp.ncdc.noaa.gov/pub/data/paleo/paleocean/by_contributor/mann2003b/mann2003b.txt)]. 取得日: 2009/07/21.

<sup>2</sup> Vishnu (ヴィシュヌ) 神はインドでは水の神ではないが、リグ・ヴェーダにこの神がIndraの悪魔退治による水の解放を助けたことを暗示する章句が残されている。: 「(インドラの言葉) 友なるヴィシュヌよ、いと広く闊歩せよ。天よ、ヴァジュラに自由の場を与えよ、[天を] 支えんがために。われらはヴリトラを殺さん。諸川を解放せん。彼ら(諸川)は放ち流されて、インドラの激励に応じて進め。」 Rg.8.100.12

<sup>3</sup> 現在、レリーフは東ジャワ州にあるモジョクト博物館に保管されている。

<sup>4</sup> Ann Rasmussen Kinney, Marijke J. Klokke, Lydia Kieven (author), Rio Helmi (photographs), *Worshipping Siva and Buddha: The Temple Art of East Java*, University of Hawai'i Press Honolulu. 2003. p.65.

このレリーフのAirlanggaは、ガルダの背にのるVishnuの姿をしている。

<sup>5</sup> 原話であるインドの大叙事詩Mahābhārata第1巻にはArjunaの誕生譚が語られている。

Pāṇḍu (パーンドゥ) 王の五王子の一人であるのになぜIndra神の子とされているのかに関して次のように説明されている。Arjunaの母は、Pṛthā (プリター) 妃である(他にKuntī妃がいる)。その夫Pāṇḍu王は聖仙の呪いのために交わりができず、後継ぎが得られないため、子供を授けてほしいと神々に祈った。そうして正義の神Dharma (ダルマ) からは長男を、風の神Vāyu (ヴァーユ) からはBhima (ビマ) を、神々の王Indra (インドラ) からはArjuna (アルジュナ) を儲けた。

<sup>6</sup> Skt.nivāta-kavaca 「貫通されない(安全な)鎧をもつ者」の意味。(nivāta: "ein undurchdringlicher Panzer" Boethlingk-Roth)

M. Lambekはniwatakawacaを「真実を映し出す性質を失った壊された鏡」と誤訳している。彼はni, wata, kawacaと三つに分割したところは正しかったが、ni (あるいはnir) を"niwana" (=nirvānaと考えたのか? 筆者注) に由来するものとし、「欲望からの自由」「過去や未来からの自由」また「偉大なる神」を意味すると解した。Wataは、「視界を妨げる」や「真実を覆い隠すもの」とし、最後のkawataは"kaca"に由来し、「鏡」を意味すると考えた。あきらかにこれは誤まりである。Michael Lambek, *A Reader in the Anthropology of Religion*, Wiley-Blackwell, 2002. p.238

<sup>7</sup> 松本亮『ワヤン・ジャワ、語り集成 - マハーバーラタ編 - 〈上〉』八幡山書房(2009) p.392. ただし、カッコ内は筆者加筆。

<sup>8</sup> 前掲書、p.399. ただし、カッコ内は筆者加筆。

<sup>9</sup> 前掲注に同じ

<sup>10</sup> 前掲書、p.406. ただし、カッコ内は筆者加筆。

<sup>11</sup> 前掲注に同じ

<sup>12</sup> 前掲書、p.407. ただし、カッコ内は筆者加筆。

<sup>13</sup> 原話Mahābhārataでは、獵師キラータに身をやつしたSiva神は神々の要望をうけて苦行に励むArjunaのもとを訪れ、その戦いぶりに満足して、Sivaの武器を与える (Mbh.III.40-41)。Mbh.では唐突に登場する「猪」(羅刹Mūka)が、古ジャワ語の叙事詩Arjunawīwahaにおいて、田畑を荒らす悪獣として描かれているのは興味深い。

<sup>14</sup> Mahābhārataでは、Nivātavaca族が激しい苦行をしたためにIndraの都が奪われたとされており(Mbh.III.16928-29)、ここで考察されているような災害への言及はない。

<sup>15</sup> John Stephen Lansing, *Perfect order: recognizing complexity in Bali*, Princeton studies in complexity. 2006. pp.47-48

<sup>16</sup> Galeri Wayang [Niwatakawaca],

[http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image\\_id=345&mode=search](http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image_id=345&mode=search),

取得日: 2009/09/10

<sup>17</sup> Galeri Wayang [Indra],

[http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image\\_id=164&mode=search](http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image_id=164&mode=search),

取得日: 2009/09/10

<sup>18</sup> Galeri Wayang [Arjuna],

[http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image\\_id=3&mode=search](http://pitoyo.com/duniawayang/galery/details.php?image_id=3&mode=search),

取得日: 2009/09/10

<sup>19</sup> H.I.R.Hinzler, The Usana Bali as a Source of History, in: Taufik Abdullah (ed.), *Papers of the Fourth Indonesian-Dutch History Conference, 1983, 2. Literature and History*,.

Yogyakarta: Gadjah Mada University Press. 1986. pp.138-139.

ただし、カッコ内は筆者加筆。

<sup>20</sup> Skt.īśvara 自在天。Siva神に同じ。Kailāsa山を住処とする。

<sup>21</sup> Vāsukiは龍王で、Sumeru山にその身が結ばれて神々によって乳海攪拌がなされたとき、苦しさの余り猛毒を吐き出した。これをSiva神が飲み込んで世界を救ったというインド神話がある。

<sup>22</sup> 以下に語られるMaya Danawaの物語のストーリーはインドネシア独自の展開となっている。たしかにMayaという鬼はArjunaと関係がある。Mbh ādi-parvan(第1巻)の最後の部分で、火神Agniが燃やした森の中からArjunaの好意によって唯一人救われた鬼の名がMayaなのである。アスラのなかのViśvakarman (工巧神) と言われる彼は、助けてもらったお礼にIndraprasthaの都に、世にも豪華な宮殿をたてる。その宮殿の建材はKailāsa山の巨大な宝石の原石であったと言われる。またMbh第2巻冒頭にはナラダNārada仙も登場して教を垂れている。このように登場人物はインドとインドネシアの物語でかなり共通しているのに、ここで語られる展開はユニークなものとなっている。

<sup>23</sup> 下に続く物語の終わりの部分を描いているものと考える。

- <sup>24</sup> H.I.R.Hinzler, 1986, p.141. ただし、カッコ内は筆者加筆。
- <sup>25</sup> 前掲書、pp.144-145 (list: 7-8) . ただし、カッコ内は筆者加筆。
- <sup>26</sup> Sinha, A., Cannariato, K.G., Stott, L.D., Cheng, H., Edwards, R.L., Yadava, M.G., Ramesh, R. and Singh, I.B. 'A 900-year (600 to 1500 A.D.) record of the Indian summer monsoon precipitation from the core monsoon zone of India.' *Geophysical Research Letters* 34 : 10.1029/2007GL030431. 2007. p.L16707-1/5
- <sup>27</sup> 前掲書、p.L16707-3/5
- <sup>28</sup> Michael Novak, *Toward a Theology of the Corporation (revised edition)*, American Enterprise Institute. 1990. p.14
- <sup>29</sup> John Stephen Lansing, *Perfect order: recognizing complexity in Bali*, Princeton studies in complexity. 2006. pp.47-48

## 参考文献

- 1) Ann Rasmussen Kinney, Marijke J. Klokke, Lydia Kieven (author), Rio Helmi (photographs), *Worshiping Siva and Buddha: The Temple Art of East Java*, University of Hawai'i Press Honolulu. 2003
- 2) H.I.R.Hinzler, The Usana Bali as a Source of History, in: Taufik Abdullah (ed.), *Papers of the Fourth Indonesian-Dutch History Conference, 1983, 2. Literature and History*,. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press. 1986
- 3) John Stephen Lansing, *Perfect order: recognizing complexity in Bali*, Princeton studies in complexity. 2006
- 4) 松本亮『ワヤン・ジャワ、語り集成 - マハーバーラタ編 - 〈上〉』八幡山書房 (2009)
- 5) Michael Lambek, *A Reader in the Anthropology of Religion*, Wiley-Blackwell ,2002
- 6) Michael Novak, *Toward a Theology of the Corporation (revised edition)*, American Enterprise Institute. 1990
- 7) Sinha, A., Cannariato, K.G., Stott, L.D., Cheng, H., Edwards, R.L., Yadava, M.G., Ramesh, R. and Singh, I.B. 'A 900-year (600 to 1500 A.D.) record of the Indian summer monsoon precipitation from the core monsoon zone of India.' *Geophysical Research Letters* 34 : 10.1029/2007GL030431. 2007.
- 8) Stuart Robson, *Arjunawiwāha: The marriage of Arjuna of Mpu Kanwa*, KITLV Press Leiden. 2008
- 9) 上村勝彦『原典訳 マハーバーラタ3』ちくま学芸文庫 (2002)

(平成21年 9 月25日受付)